

作家・北杜夫と躁うつ病

— 北杜夫をめぐる人びと —

高橋 徹 (信州大学総合健康安全センター・
信州大学医学部精神医学教室)
松下 正明 (東京大学名誉教授)

〈要旨〉作家・北杜夫（1927–2011年）に影響を与えた人物を、創作における環境要因の観点から考察した。まず北杜夫の人生を大きく10期にわけ、その時代ごとに関わりのあった主要人物を、創作の観点から概説した。創造性に関与する環境要因として、アンドリアセンの著作を参考にしながら、「工房的組織」と「パトロンの支援」という観点で考察した。主要な「工房的組織」として「松本高校」「文芸首都」「文学界」「慶應大学」を、「パトロンの支援」として「中央公論社」「新潮社」「家族・親族」「慶應大学」などをあげた。さらに創作者として活躍した時代背景や、文芸評論家・奥野健男の「プロデューサー」としての位置付け等についても言及した。北作品のベストセラーが続いた時代は、日本の高度経済成長期と重なっており、「経済的な繁栄」も新規的文化が醸成されるための環境を整えたと考えられた。

1. はじめに

第二報と第三報においては、北杜夫における「双極性障害」と「創作」との関連性を主に論じたが^{54,55)}、そのなかで作家・北杜夫の成立には、辻邦生の存在が少なからず関与していたことにも言及した。あるいは『どكتورマンボウ航海記』の出版に、文芸評論家・奥野健男と中央公論編集者・宮脇俊三が深く関わっていたことも述べた。

ある人物が何らかの作品を創作し、その創作物が世間に受け入れられ、一人の創作者として認知されるまでには、そのあらゆる段階で数多くの人間が介在する。前述した辻邦生、奥野健男、宮脇俊三は、決定的な役割を担ったキーパーソンといえるが、それ以外にも、同業の作家や出版編集者、批評家などが有形無形に影響を及ぼしている。また生活史にまでさかのぼれば、人格形成や能力育成に関与した家族や親族も、重要な環境因といえる。小説『楡家の人びと』のモデルとなった斎藤家には、歌人である父・斎藤茂吉を筆頭に、母・斎藤輝子や兄・斎藤茂太など、北杜夫をとりまく重要人物が数多く存在する。また祖父と父が経営した精神病院^{注1)}の影響や、長じて北自身が精神科医となったことも、作家・北杜夫を語る上での重要な要素である。父の強い勧めがなければ医学部には進学しておらず、さらに慶應大学病院神経科に入局していなければ船医となっていた可能性は低く、そうなれば『どكتورマンボウ航海記』が創作されることもなかったであろう。

北杜夫の周辺人物を大きく括れば、「作家」「精神科医」「家族」という分け方もできるが、家族である父・斎藤茂吉や兄・斎藤茂太は、精神科医でもあり文筆家（歌人・随筆家）でもある。また友人の堀内秀（なだいなだ）は、作家であり同門の精神科医でもあった。そして「作家」であり「精神科医」でもある北杜夫は、自身が双極性障害に罹患したことを公にし、それを随筆に書き、「躁うつ病」は北杜夫の代名詞のひとつ（ある種の看板）¹⁰⁾にまでなった。北杜夫は、これまで既に様々な立場から論じられてきたが、ほぼ必ずといってよいほど、この「躁うつ病」はキーワードとして取り上げられている。北杜夫の作品は日本文学史においてエポック・メイキングな存在であると考えられるが⁵⁴⁾、表現精神病理学（あるいは病跡学、創造性の学）においても大変興味深いクリエイターといえる。

図1（次項）に、北杜夫の創作に関与したと考えられる主要人物をあげ、大まかな枠組みごとに配置した。本論では、まず図内に示した人物を、創作に及ぼした影響の観点から時系列にそって記述していく。また創造性に関与する環境要因として、アンドリアセン（Andreasen）の著作¹⁾を参考にしながら、「工房的組織」と「パトロンの支援」という観点で考察した。さらに創作者として活躍した時代背景や、文芸評論家・奥野健男の「プロデューサー」としての位置付け等についても言及した。本研究は、信州大学医学部医倫理委員会の承認を得ている（no. 3477）。敬称は略させていただいた。

2. 北杜夫に関わる人びと

以下に北杜夫（1927-2011年）の人生を大きく10期にわけて、その時代ごとに関わりのあった主要人物を、創作の観点から概説していく。年譜内容は、文献10, 35, 45, 46, 48などを引用・参考にした。

2-1. 出生・幼少期・中学時代

1927年（昭和2年）5月1日、父・斎藤茂吉（当時満44歳）と母・斎藤輝子（満31歳）の次男として東京に出生。父である歌人・斎藤茂吉は、この数日前に養父・斎藤紀一より青山脳病院長の職を引き継いだ。母・輝子は紀一の次女。兄・茂太（1916-2006）、姉・百子（1925-1959）、妹・昌子（1929-1971）の4人兄弟。1歳時に、青山脳病院を一代にして築いた祖父・紀一が心臓麻痺で死去。6歳時、母・輝子の「ダンスホール事件」^{注2)}により、母は父から謹慎を命じられ、叔父・西洋（紀一の長男：1901-1958）の家に移り住み、以後、別居状態となる。母のいない生活となるも、翌年からは日曜日に輝子のいる叔父宅を訪れるようになり、母と会える日を楽しみにしていた。10歳時、昆虫採集を始める。子供雑誌でキノコの人工栽培の広告をみて菌糸を購入し、なめ茸を自宅で作る。動植物や昆虫の知識は、農学部で学んだ叔父・米国（紀一の次男：1909-1944）に教わり、この叔父を慕っていた⁹⁾。12歳時、急性腎炎となり4-5カ月間、自宅療養。その間、家人から『原色千種昆虫図譜』を買ってもらい熟読。13歳、私立麻布中学に入学し、博物班（同好会）に所属する。この同好会には一年先輩に奥野健男がおり、北は昆虫学者を、奥野は

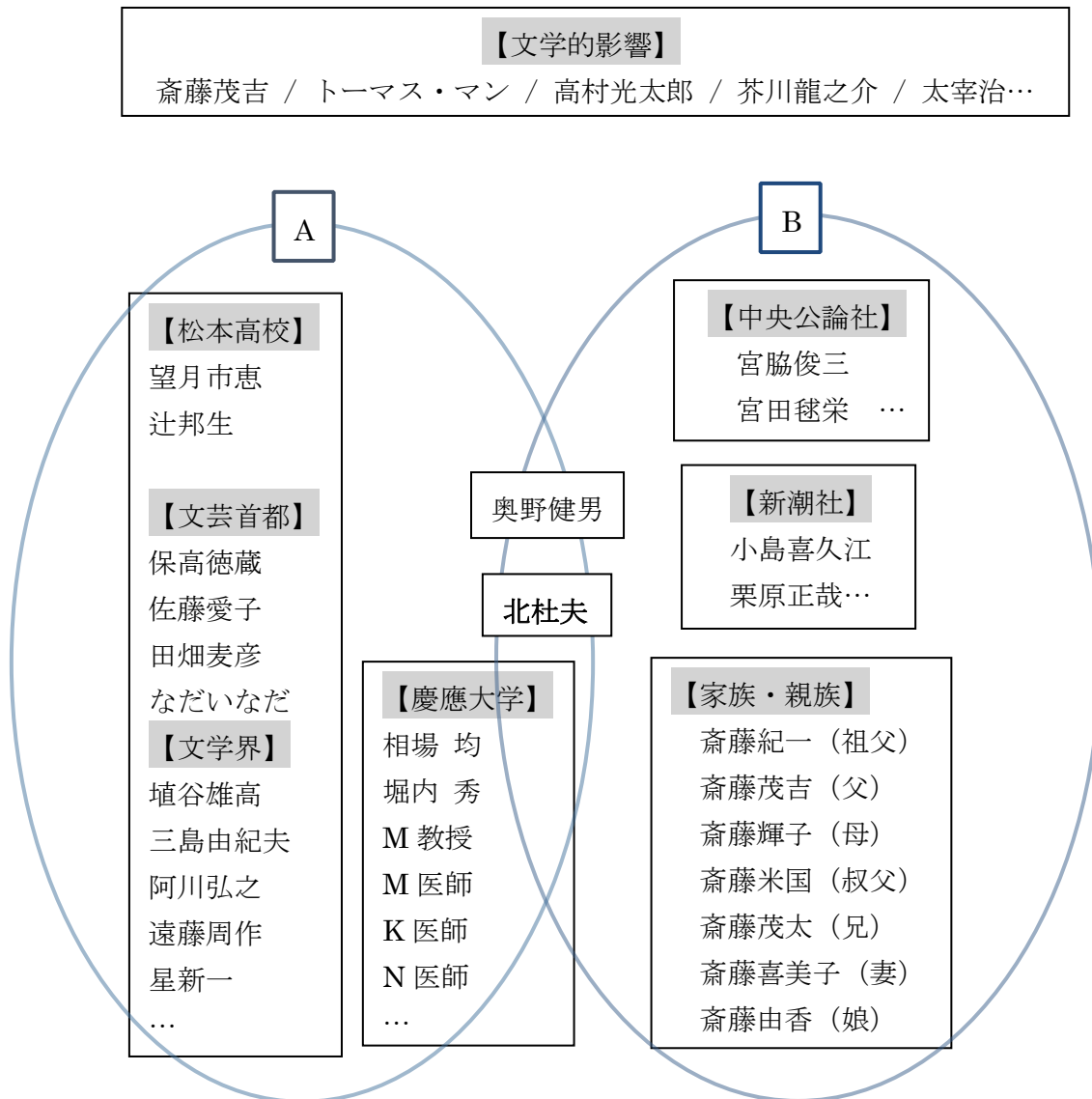


図 1. A : 工房的組織 B : パトロンの支援

天文学者を志していた。14歳時の1941年12月、太平洋戦争勃発。17歳、かつて松本高校生であった叔父・紀仁の写真に憧れ^{6,9,56}、(旧制)松本高校を受験するが不合格となる。東京帝大臨時医専に合格。松本高校の再受験を希望したが父の命により医専に入学。しかし茂吉の許可があり、3日間で退学し、麻布中学5年に復学。18歳、松本高校理科乙類に合格。空襲により昆虫標本を焼失。松本高校思誠寮で1年先輩の辻邦生と出会う。

〔関連人物〕

この時期は当然、家族・親族からの影響が大きい。小説『幽霊』はこの幼少期から青年期を題材とした自伝的小説であり、小説『榆家の人びと』は斎藤家をモデルとした年代記である。『どくとりマンボウ追想記』で、この時期の思い出が語られている。父・茂吉、母・輝子の存在は大きい。それ以外には、叔父・斎藤米国から動植物の知識を教授され、当時の北は昆虫学者を目指していた。叔父・米国は、『榆家の人びと』『為助叔父』『ぼくのおじさん』などの登場人物のモデルになっており、北はこの叔父について、「博物学が好きで、虫のことなんか教えてくれた最初の人」「幼少期のぼくに影響を与えた最大の人物かもしれない」と語っている⁴¹。昆虫の知識は、多くの小説内に散見され、また『どくとりマンボウ昆虫記』としても結実する。中学時代には、後に作家・北杜夫の大成に重要な役割を果たす奥野健男と出会っている。

2-2. 旧制松本高校時代 (1945-48年 : 18-21歳)

18歳、父の歌集『寒雲』に感動し、自分でも短歌を創作するようになる⁵⁶。終戦。食料難のため閉寮、休校。東京の兄宅に移り住む。19歳、山形の父の弟が経営する旅館の世話になる。学校再開で寮に戻る。ニーチェ、ドストエフスキーなどを読む。懸賞小説を書く。20歳、交友会の会合で酩酊状態となり、二人の教授の頭を殴る事件を起こす。それをきっかけにドイツ語の望月市恵教授^{註3}と親しくなり、トーマス・マンやリルケの話を聞く。歌集・詩集(高村光太郎、萩原朔太郎、中原中也など)を愛読。フェアブルのような学者になることを希望していたが、父から医者なることを強く勧められ、動物学志望を断念する。

〔関連人物〕

この松本高校時代は、父・斎藤茂吉の歌集や高村光太郎などの詩集を愛読し、自らも短歌や詩を創作した。(北の詩は『北杜夫全集』に収録。また歌集『寂光』(1981年)を後に出版している)。親友・辻邦生と恩師・望月市恵の影響から、ドイツ作家トーマス・マンの作品に親しむ。この高校時代と次の医学部時代の逸話は、『どくとりマンボウ青春記』に詳述されている。

2-3. 東北大学医学部・文芸首都時代 (1948-53年 : 21-26歳)

21歳、東北大学医学部に合格。仙台に下宿。トーマス・マンの『トニオ・クレーゲル』を愛読し、文庫本を常に持ち歩く。崇拜する高村光太郎に詩稿を送るも返事はなく、その後、創作は詩から小説に移行していく。黄山木精のペンネームで小説を書き、代作として雑誌に採用。詩の雑誌「文学集団」に北宗夫のペンネームで投稿し掲載。22歳、芥川龍之介、太宰治を繰り返し読む。初期作品『百蛾譜』『幼いメリクリウス』『岩造の話』『硫黄泉』等を創作。23歳、同人誌・文芸

首都に北杜夫のペンネームで投稿し、『百蛾譜』『狂詩』が掲載。保高德蔵が主宰する文芸首都の同人となる。『幽霊』の執筆を開始。25歳、東北大学医学部卒業、同大附属病院でインターン実習開始。26歳、父・茂吉が他界。

〔関連人物〕

この時期、小説の執筆を本格的に開始し、代表的な初期作品を多産している。保高德蔵が主宰する同人誌「文芸首都」に参加し、作家修行時代が始まる。当時の保高と北を知る原子朗（詩人）と森禮子（作家）は、「保高德蔵の人柄というか、純な文学魂から発してくる不思議な包容力みたいなもの、作風の新しい古いということを超えて、大変な魅力だったですよ。こわいところもありましたしね。（原述）」「保高先生も北さんを秘蔵っ子のように愛してらしたけど、北さんも保高先生をたいへん大事にしてらっしゃいましたね。（森述）」⁴⁾と対談で語っている。

2-4. 慶應大学神経科・文芸首都時代（1953-58年：26-31歳）

26歳、医師国家試験に合格し、慶應大学病院神経科に入局。東京の兄宅に居候する。『幽霊』が文芸首都に連載開始。文芸首都編集委員となり、同人の田畑麦彦、佐藤愛子、堀内秀（なだいなだ）と親交。27歳、『幽霊』を自費出版するも、ほとんど売れなかった。28歳、敬愛するトーマス・マンが逝去。辻邦生との追悼対談を文芸首都に掲載。『幽霊』を文芸評論家の奥野健男に送っていたが、たまたま軽井沢で奥野と出会い、麻布中学の先輩・奥野健男であったことを知る。（奥野は『幽霊』の著者・北杜夫が、中学時代の後輩・斎藤宗吉であることを知る）。29歳、奥野の紹介により、雑誌・近代文学に『岩尾根にて』が、雑誌・三田文学に『霊媒のいる町』が掲載される。これを機に、「近代文学」主宰者の一人である埴谷雄高と親しくなる。『人工の星』（文芸首都掲載）が芥川賞候補作となる。慶應大学病院より山梨県立精神病院に転勤。30歳、同病院より慶應大学に戻る。『狂詩』（改稿版：文芸首都掲載）が芥川賞候補作となる。

〔関連人物〕

この時期は、特に「文芸首都」において、同人誌仲間との交流を本格化させ、文壇での成功を目指し切磋琢磨している。同人誌仲間（田畑麦彦、佐藤愛子、なだいなだ等）以外にも、旧制松本高校時代の友人（辻邦生、堤精二、永井信一など）と恩師（古川久）らと定期的な交流を続けた（「ダンネ会」と称した）³⁾。また堀内秀（ペンネーム「なだいなだ」）は、文芸首都の同人であるとともに慶應大学病院神経科の同僚でもあった。慶應大学病院神経科の医局は、文学関連の系列とは別の工房的組織（後述）として位置づけられ、精神科医としての知識と経験を積むと同時に、海外留学経験のある同門医師（相場均、M医師：松島医博、K医師：加藤医博など）³⁰⁾からの刺激や影響が、『どくどくマンボウ航海記』に繋がったと考えられる。さらに奥野健男との再会が大きな転機となる。北は文芸評論家の奥野に自費出版の『幽霊』を送付していたが、軽井沢で偶然出会い、双方が麻布中学時代の知人であることを知る。奥野は、北の原稿を他の同人誌「近代文学」「三田文学」に持ち込み、これにより文芸首都以外の雑誌に作品が掲載されるようになる。文芸評論家としての地位を確立していた奥野は、北の活躍の場を広げ、埴谷雄高や三島由紀夫との接点を作り、文壇での成功の端緒を開いていく。

奥野健男との再会に関する北の記述¹¹⁾。「奥野さんと再会したのは、それからずいぶんと歳月が流れた頃である。私はインターンが終わる頃に、『幽霊』という処女長篇を書いていた。これは母に金をたかって自費出版をした。それを文壇の作家、評論家に寄贈したが、まったくといってよいほど反響がなかった。(中略) そうして、私は医者となり、相変わらず売れぬ原稿を書いていた。ただ東京に戻ってから、夏の休暇には第二の故郷信州を思わせる軽井沢の民家の部屋を借りて暮らしたものだ。そういったある一日、星野温泉の入り口の誘蛾灯のところで、むかし懐かしい奥野さんにばったりと出会った。(中略) そのしばらく前に私は新進評論家として文章を書いている奥野健男なる名前は知っていた。ただ、まさか麻布中学の奥野さんとは想像もしていなかった。その『太宰論』^{註4)}はすぐれたものであったし、当時、三島由紀夫をも論じていた。その三島論は、精神分析学を応用した批評であった。私も大学時代フロイトは熟読して、将来分析学をやろうかとも考えていた。それで、小癩な評論家め、おれのほうが精神分析は本職だぞ、という小生意気な意識から、私は半ばそれを批判する文章を書きだしてもいた^{註5)}。ところが、その新進評論家は麻布中の先輩である奥野さんとわかった。彼も『幽霊』を送られていたが、北杜夫なぞというペンネームのため、まさか昔の昆虫マニアの斎藤宗吉だとは想像だにできなかったという。(中略) 正直に言って、二人ともあっけにとられたようである。それ以来、私と奥野さんとの交友は復活した。だが、彼はすでに一流文芸誌に書いている評論家であるし、私はまだ『文芸首都』『半世界』などの同人雑誌作家なる存在にすぎなかった。あるとき、私は『岩尾根にて』という短篇を書きあげ、自分でも気に入った作品ともいえた。で、つい奥野さんに見せる気になった。すると、これは悪くない作品だから、『近代文学』に紹介しようと言われた。『近代文学』といえば戦後の一時期を担った雑誌で、埴谷雄高、平野謙、荒正人諸氏などがずらり並んでいる。私は、『あの雑誌はこわそうな人ばかりがいるから、いいよ』と、いったんは断った。しかし奥野さんは半ば勝手に原稿を持って行ってしまい、しかもそれが載せられるという報知があった。(中略) 『近代文学』に作品を発表できたことも嬉しかったが、埴谷雄高氏にお目にかかれたのはもっと嬉しかった。(中略) それから私は奥野さんと頻々と会うようになった。一つはやがて私の『マンボウ航海記』を世に出してくれた宮脇俊三氏をまじえた交際であり、もう一つはしばらくあとのことで三島由紀夫氏がSFも好きで、そういう文学の話にもあう私たち二人をときどき招いてくださったからである。(中略) 一方、私はマンボウ航海記から戻ってきてから、『航海記』を書かないかという話は三つ四つあった。しかし、私は純文学をやりたいと思っていたので、そのすべてを断っていた。しかし、あくまでもその執念を捨てなかったのが、元中央公論の宮脇俊三氏である。彼と奥野氏は小学校の同輩であった。それで、三人してよく新宿の樽平で飲み、馬鹿話をした。」¹¹⁾

2-5. 『どくとるマンボウ航海記』前後 (1958-60 : 31-33歳)

31歳、商業雑誌に原稿を持ち込んで不採用となるが続いていたが、『埃と燈明』が商業誌である「新潮」に掲載される。11月、水産庁調査船・照洋丸の船医として出航。32歳、4月に航海より帰国。『谿間にて』(新潮掲載)が芥川賞候補作となる。帰国後、執筆中の『夜と霧の隅

で』の創作が行き詰まる。奥野健男は、中央公論社編集者・宮脇俊三に北杜夫の存在を教え、「航海記」の執筆依頼をするよう勧める。宮脇は北と親しくなり、北は当初断っていた航海記の執筆を受諾。『どくとるマンボウ航海記』を書き下ろす。翌1960年3月に『どくとるマンボウ航海記』が中央公論社より出版され、ベストセラーになる。新潮5月号に『夜と霧の隅で』が掲載。6月、新潮社より『夜と霧の隅で』を刊行。7月、『夜と霧の隅で』が芥川賞受賞。9月、『幽霊』を中央公論社より刊行。10月、『羽蟻のいる丘』を文芸春秋社より刊行。

〔関連人物〕

1960年（33歳）は、『どくとるマンボウ航海記』のベストセラー、『夜と霧の隅で』の芥川賞受賞、『幽霊』の刊行と続き、北杜夫が国民的作家となる転換点の年である。『どくとるマンボウ航海記』のなかに登場するのが辻邦生、なだいなだ、相場均、M医師、N医師などだが、出版という意味での決定的な役割を担ったのが、奥野健男と宮脇俊三である。以下が、後年（2000年）に宮脇が回顧した「どくとるマンボウの誕生」³⁸⁾の経緯。

「北杜夫さんの存在を教えてくれたのは、私の小学校（青山師範附属）の同級生だった奥野健男君である。私たちは昭和14年に卒業し、彼は麻布中学へ進んだ。麻布中での奥野君の一年後輩に昆虫好きの齋藤宗吉さん（北杜夫）がいた。奥野君は小学校時代から天文少年だったので、「博物班」の仲間として仲よくなったらしい。それから戦中戦後を経ての約20年後、昭和33年の暮ごろのことである。当時の奥野君は新進の文芸評論家で、私は中央公論社の出版部員だった。そうした関係で、仕事とも旧友ともつかぬ付き合いをしていた。飲むことも多かった。そんな、ある晩、奥野君が言った。

『北杜夫を知っているかい』

私は、名前は知っているが、まだ読んだことがないと答えた。奥野君は、それはよくないことだと言い、北さんについて説明してくれた。

一、注目すべき純文学作家である。『幽霊』を読み、『谿間にて』などを読み。

二、北君は精神科医で、いま船医として水産庁の小さな調査船に乗りこんで大西洋に行っている。その船上からの通信が「文藝首都」に連載されているが、これが面白いんだ。帰ってきたら航海記を一冊書いてもらったらどうかな。

三、北君は齋藤茂吉の次男だが、そのことは極力伏せている。特別扱いされたくないのだろう。

持つべきものは友、三年前に他界した旧友奥野健男は、新米編集者に貴重な情報を提供してくれたのである。」³⁸⁾

2-6. 躁病エピソード顕在化前（1961-65年：34-38歳）

34歳、慶應大学病院助手を辞職。精神科医としては、兄の経営する齋藤神経科医院の診療のみを継続。4月結婚。結婚後も兄宅の居候を続ける。『遙かな国 遠い国』を刊行。8月、『楡家の人びと』執筆開始。『船乗りクプクプの冒険』連載開始。『あくびノオト』（新潮社）、『どくとるマンボウ昆虫記』（中央公論社）刊行。10月、宮脇俊三宅の隣地を購入、自宅をかまえる（兄宅より独立）。35歳時、『楡家の人びと』第一部を新潮に連載開始。4月長女・由香誕生。『南太平洋ひ

るね旅』(新潮社)、『船乗りクプクプの冒険』(集英社)刊行。相場均と香港・マカオを旅行。カジノに興じる。36歳、『楡家の人びと』第二部が難航し、三島由紀夫に相談。長篇執筆の心得について教示を受ける。『どくとりマンボウ小辞典』(中央公論社)、『へそのない本』(新潮社)刊行。37歳、『楡家の人びと』(新潮社)を刊行し、毎日出版文化賞受賞。『高みの見物』の新聞連載開始。再び相場均と香港・マカオ・台北を旅行し、カジノに興じる。38歳、松本高校の先輩・小谷隆一が隊長を務める京都府立山岳連盟のカラコルム・ディラン峰登山隊にドクターとして参加。『高みの見物』刊行(新潮社)。兄の医院での診療をやめ文筆に専念する。

〔関連人物〕

喜美子夫人と結婚。独立するために土地を探すも、最終的に宮脇俊三から「隣地に空地がある」との情報を得て、宮脇宅の隣に新居を建てる。兄・斎藤茂太の医院で診療を続けていたが、それを辞め専業作家となる。経済的にも職業的にも、「作家・北杜夫」として独立をはたす。三島由紀夫の教示を得ながら『楡家の人びと』を執筆し、刊行時には、三島由紀夫が推薦文(「これぞ小説なのだ!」)を寄せる。長女出生。公私ともに充実した時期といえる。

2-7. 躁病エピソード顕在化～全集出版(1966-77年:39歳-50歳)

39歳、1966年4月に最初の躁状態となり、自宅増築などをする。『どくとりマンボウ途中下車』(中央公論社)、『天井裏の子供たち』(新潮社)、『白きたおやかな峰』(新潮社)刊行。『奇病連盟』の新聞連載開始。40歳、『怪盗ジバコ』(文芸春秋社)、『奇病連盟』(朝日新聞社)、『マンボウおもちゃ箱』(新潮社)刊行。日本文芸家協会理事となる。2回目の躁状態。41歳、『どくとりマンボウ青春記』(中央公論社)、『黄色い船』(新潮社)刊行。国務省招待により訪米し、NASAの月ロケット計画等を見る。3回目の躁状態。42歳、遠藤周作が主宰の劇団樹座の公演「ハムレット」に主演。4回目の躁状態。取材のため訪米シアポロ打ち上げを見学。その際、「月乞食」となる。帰途ヨーロッパにまわり、辻邦生と汽車旅行をし、トーマス・マンの墓にまいる。『さびしい王様』(新潮社)、『星のない街路』(中央公論社)刊行。日本文芸家協会理事を辞任。43歳、劇団樹座公演「夏の夜の夢」に蛾の妖精役で出演。辻邦生との対談『若き日と文学と』(中央公論社)刊行。1970年11月、三島由紀夫が自決。44歳、『月と10セント』(朝日新聞社)刊行。劇団樹座公演「白浪子守唄」にギター易者役で出演。45歳、『酔いどれ船』(新潮社)、『ぼくのおじさん』(旺文社)刊行。『幽霊』第二部の取材を兼ねて、辻邦生とドイツ・デンマーク等を旅行する。46歳、『マンボウぼうえんきょう』(新潮社)刊行。47歳、『さびしい乞食』(新潮社)刊行。遠藤周作との共著『狐狸庵vsマンボウ』(講談社)刊行。ネスカフェゴールドブレンドのテレビCMに出演。48歳、講談社主催のヨーロッパ在留邦人のための講演旅行に、遠藤周作、阿川弘之と参加。阿川弘之とマダガスカル島に旅行。ソ連作家同盟の招待で、星新一、大庭みな子とソ連を旅行。49歳、『どくとりマンボウ回想記』(中央公論社)、『マンボウ周遊券』(新潮社)刊行。阿川弘之と地中海旅行に行く。『北杜夫全集』(新潮社:全15巻)刊行開始。6年ぶりの躁状態となり、株取引で大借財を負う。50歳、劇団樹座公演「カルメン」に闘牛士役で出演。雑誌の取材で中南米を旅行。帰国後、躁状態がおさまる。『さびしい姫君』(新潮社)、『マンボウ響躁曲』(文芸春秋)

刊行。講談社漫画賞の選考委員となる。

〔関連人物〕

作家活動を続け文壇での評価が確立するが、その一方、躁うつ病が顕在発症⁵³⁾、その病状の波に本人も周囲も翻弄される。旧知の作家・辻邦生や、先輩作家・遠藤周作、阿川弘之などと交流を深め、対談集などをだしている。また援助者の一人であった三島由紀夫の自決（三島事件）に衝撃を受けている^{10, 45)}。49-50歳時（1976-77年）の躁状態下においては、株に熱中し大損害をこうむった。同時期（1976年9月-1977年11月）に、新潮社より「北杜夫全集」が刊行されたが、その「創作余話」の末尾で北は、主要な出版元である新潮社と中央公論社に謝辞を著している。「私は昨年10月から、或る理由から相当の負債を担うようになった。今年、昭和52年に、つまらぬ対談集などまで相当数ださねばならなかったのは、すべて各出版社の前借りを返すためであった。（中略）今まで、かなりの数の編集者に世話になったが、その第一は中央公論社の宮脇さんであり、無名の私の『航海記』にカット一つまで真剣にとりくんでくれた。また、出版社としては新潮社にもっとも多く恩恵を受けた。新潮社のいいところは（私にとって）担当の編集者をほとんど変えぬ点にあらう。（中略）ともあれ、生きていうちに『全集』などという企画はおかしいことだが、私はさんざ迷った末、新潮社の恩義にこたえようとしたに過ぎない。かなりの作品を渡してくれた中央公論社にも厚く御礼したい。」³⁰⁾

2-8. 「マンボウ・マブゼ共和国」と「文華の日」（1978-87年：51歳-60歳）

51歳、奥野健男著『北杜夫の文学世界』（中央公論社）が刊行される。『マンボウ博士と怪人マブゼ』（新潮社）刊行。52歳、『輝ける碧き空の下で』連載開始。53歳、『父っちゃんは大変人』を連載開始し、翌年刊行。夏より躁状態となり、自宅を「マンボウ・リューベック・セタガヤ・マブゼ共和国」として日本から独立することを考え、主席を名乗って、米英仏独の首脳に手紙を出す。自国の札、コイン、専用煙草などを用意する。54歳、1月に国家と国旗を作り、フジテレビ「3時のあなた」に出演して独立を宣言。2月、マンボウ・マブゼ共和国の「文華の日」を開く。文華勲章に星新一、マンボウ賞に井上ひさし、マブゼ賞に奥野健男などを授与する。55歳、『輝ける碧き空の下で』（新潮社）、『マブゼ共和国建国由来記』（集英社）、『マンボウ交友録』（読売新聞社）、埴谷雄高との対談集『さびしい文学者の時代』（中央公論社）を刊行。56歳、『輝ける碧き空の下で（第二部）』を連載開始。10月、自宅で倒れ、短時間意識を失う。病院で検査を受け、節酒、節煙、減睡眠薬に努める。57歳、母・輝子死去。58歳、長年の最良チームである阪神タイガースが21年ぶりに優勝し、「サンデー毎日」に『狂気そしてトボトボと21年』を寄稿。10月、第二回「文華の日」を開く。文華勲章に遠藤周作、マンボウ賞に小林信彦、マブゼ賞に篠田一士などを授与する。59歳、『輝ける碧き空の下で（第二部）』（新潮社）刊行。『輝ける碧き空の下で』により日本文学大賞文芸部門賞を受賞。『やさしい女房は殺人鬼』（新潮社）刊行。夏に躁状態となり株取引に熱中。10月、第三回「文華の日」を開く。文華勲章にクリスチャンヌ・ル・リデック、マンボウ賞に倉橋由美子、マブゼ賞に佐伯彰人などを授与する。『マンボウの朝とマブゼの夜』（朝日新聞社）刊行。60歳、『大日本帝国スーパーマン』（新潮社）、『大結婚詐欺師』

(角川書店) 刊行。

〔関連人物〕

50歳台は、おおまかに4年周期の躁病エピソードがみられている⁵³⁾。この時期は、後期の代表作である『輝ける碧き空の下で』や、躁うつ病の病状変動を反映したユーモア小説『父っちゃんは大人』『やさしい女房は殺人鬼』『大日本帝国スーパーマン』『大結婚詐欺師』を創作している。また躁状態下で発想された独立国「マンボウ・マブゼ共和国」の式典「文華の日」を3回開催し、北に縁の深い人々が受賞者として招かれた。交友関係の詳細は、『マンボウ交友録』などに詳しい。

2-9. 茂吉評伝4部作 (1988-99年 : 61歳-72歳)

61歳、『茂吉あれこれ』を岩波書店の雑誌「図書」に連載開始^{注6)}。『マンボウ酔族館』(実業之日本社)、『或る青春の日記』(中央公論社) 刊行。娘・由佳が結婚。62歳、5月頃より躁状態となり、株取引を始める。9月、銀座の画廊で「世紀の北杜夫の書並びに絵画展」を開催。『夢一夜・火星人記録』『怪盗ジバコの復活』(新潮社) 刊行。63歳、1月うつとなるも3月に躁に転じる。躁状態で埴谷雄高と対談し、『難解人間vs躁鬱人間』(中央公論社) 刊行。娘・由佳が長男を出産。『マンボウ酔族館パートII』(実業之日本社) 刊行。10月、旧制高校OB卓球全国大会に出場。64歳、『青年茂吉』(岩波書店)、『マンボウ氏の暴言とたわごと』(新潮社)、『日米ワールド・シリーズ』(実業之日本社) 刊行。65歳、夏、躁となり株取引をする。『マンボウ酔族館パートIII』(実業之日本社)、『神々の消えた土地』(新潮社) 刊行。66歳、『どくとるマンボウ医局記』(中央公論社)、『壮年茂吉』(岩波書店) 刊行。67歳、『母の影』(新潮社) 刊行。68歳、『マンボウ酔族館パートIV』(実業之日本社) 刊行。69歳、『茂吉彷徨』(岩波書店) 刊行。遠藤周作死去。日本芸術院会員に選ばれる。70歳、『孫ニモ負ケズ』(新潮社)、『マンボウ酔族館パートV』(実業之日本社) 刊行。埴谷雄高死去。奥野健男死去。71歳、『茂吉晩年』(岩波書店) 刊行。72歳、「茂吉評伝四部作」により大佛次郎賞を受賞。『マンボウ酔族館パートVI』(実業之日本社) 刊行。辻邦生死去。11月に躁となり、12月に家族と韓国に旅行し、カジノに興ずる。

〔関連人物〕

父・茂吉の評伝を連載、刊行し、これが大佛次郎賞を受賞する。また母・輝子への追慕を綴った自伝的小説『母の影』を著しており、両親への想いを作品として残した時期といえる。また娘の結婚や孫の誕生により、家族を題材にしたエッセイ(『孫ニモ負ケズ』など)が作られている。一方でこの時期は、遠藤周作、埴谷雄高、奥野健男、辻邦生といった北杜夫に縁の深い人びとが逝去しており、その想いを、エッセイ等で吐露している²⁰⁻²³⁾。『日米ワールド・シリーズ』は、北杜夫自身と、遠藤周作や阿川弘之、佐藤愛子が実名で登場するユーモア小説である。

2-10. 北杜夫展 (2000年 : 73歳) ~

73歳、1月、躁状態が激しくなり、株取引を再開し、家族に制止される。5月、家族でラスベガスに旅行。『消えさりゆく物語』(新潮社) 刊行。9月、世田谷文学館で「北杜夫展」開催。74歳、

娘に「最後のギャンブル旅行でカジノに行こう」と誘われ、4月にマカオ、12月に香港に旅行。『マンボウ愛妻記』（講談社）、『マンボウ遺言状』（新潮社）、『マンボウ夢草紙』（実業之日本社）刊行。75歳、「北杜夫展」（軽井沢高原文庫）開催。『酔生夢死か、起死回生か。』（新潮社）刊行。76歳、『マンボウ最後の名推理』（青春出版社）刊行。宮脇俊三死去。77歳、『マンボウ 阪神狂時代』（新潮社）刊行。78歳、『マンボウ夢のまた夢』（実業之日本社）刊行。79歳、ハワイに家族旅行。兄・茂太死去。80歳、『どくとるマンボウ回想記』（日本経済新聞出版社）刊行。81歳、4月「どくとるマンボウ昆虫展」の巡回展示が始まる³¹⁾。12月、家族でハワイ旅行。82歳、5月ソウル旅行。6月、大腿骨骨折で入院。9月、「マンボウ青春記の仙台 —北杜夫と東北大学医学部」展（東北大学資料館）開催。12月、ハワイ旅行。『パパは楽しい躁うつ病』（朝日新聞出版）、『マンボウ 最後の大バクチ』（新潮社）刊行。83歳、2月、「どくとるマンボウ昆虫展」（山梨県北杜市）で講演。『マンボウ家の思い出旅行』（実業之日本社）、『若き日の友情 —辻邦生・北杜夫往復書簡』（新潮社）刊行。84歳、10月1日「どくとるマンボウ昆虫展」（軽井沢高原文庫）で講演。2011年10月24日、腸閉塞で永眠。享年84歳。

2012年、「追悼・どくとるマンボウ北杜夫 —昆虫と躁うつと文学と—」展（土屋文明記念文学館）、「北杜夫展 —美しい夢とユーモア、ふたたび—」展（軽井沢高原文庫）、「斎藤茂吉と『榆家の人びと』」展（世田谷文学館）開催。2013年、「北杜夫と松本」展（松本市立博物館）開催。2015年、「北杜夫 —どくとるマンボウの生涯—」展（仙台文学館）開催、「北杜夫文庫」創設（信州大学附属図書館）、2016年「北杜夫展」（山梨県立文学館）開催。

〔関連人物〕

家族とともに数多くの国内外旅行をしており^{25, 27, 28)}、作品も家族をテーマとしたものが多い。喜美子夫人との結婚生活を回顧した『マンボウ愛妻記』²⁰⁾や、エッセイストとなった長女・由香との対談集『パパは楽しい躁うつ病』²⁴⁾などがある。また喜美子夫人と娘・由香は、北杜夫の素顔を知る貴重な証言者となっている^{43, 44, 51)}。晩年に開催された「北杜夫展」には妻と娘が同伴し、さらに逝去後に開催された「北杜夫展」では、喜美子夫人と長女・由香が講演者として登壇している。

以下は喜美子夫人による回想。「躁の時でも鬱の時でも、その生活ぶりはエッセイから読み取れる印象より、ずっと深刻なものです。主人は鬱のほうが症状が重かったのですが、私が楽なのも鬱の時でした。躁状態の時は、もう私にはとても手がつけられませんでしたので。」「主人と生活するということは、3人の人格と付き合うようなものでした。昔どおりの優しくて穏やかな主人、それから躁の主人、鬱の主人と。躁状態でも、困ってしまう部分と、かわいい、おもしろい部分があつて。ですから結局、主人を憎めないのです。」⁴⁴⁾「だんだんと歳を取りますと、爆発するエネルギーがなくなってきたんでしょうね。孫が生まれた頃にはもう、躁になることはありませんでした。」⁴⁴⁾「躁病のときは、あまりにいろんなことをしでかすので、私も途方に暮れて、はじめの頃はうわーって泣いていたこともありました。どうしていいかわからなくて。親しい精神神経科医の先生にも相談しましたが、『宗吉（本名）は芸術家だから』『北さんは才能もあるのだから』とおっしゃるのです。薬で治してしまうというのもどうかというので、症状が収ま

るまでは仕方がないのかなと覚悟していました。そういうときに、佐藤愛子さんのご著書『戦いすんで日が暮れて』^{註7}を読んで、『あ、そうだ。ぐずぐず、めそめそ、がっかりばかりしないで、戦えばいいんだ』と元気づけられたりしました。本当に愛子先生には感謝しております。」⁴³⁾

3. 「工房的組織」と「パトロンの支援」

北杜夫に関わった人びとに焦点をあてながら、北杜夫の人生を大きく10期にわけて概説してきた。これをもとに「北杜夫に関わる環境因子」を、アンドリアセンが論じた「創造性を育成する環境因」¹⁾を参考に考察してみる。

米国精神科医のアンドリアセン (Andreasen) は、米国精神医学界を代表する精神科医の一人であり (アメリカ精神病理学会や精神病研究学会の会長を歴任)、神経画像研究を専門とする脳科学者として広く知られているが、それ以前に英文学教師に就いていた時期があり、「ルネサンス期英文学の研究」で哲学博士を取得している。そのような経歴から、「創造性と脳」を研究テーマとしており、著書『天才の脳科学 創造性はいかに創られるか』¹⁾を刊行した。アンドリアセンの初期研究には、30人の作家を対象とした調査研究があり、作家群では対象群に比して有意に気分障害の病歴が多くみられたと報告している。

同著書『天才の脳科学 創造性はいかに創られるか』¹⁾のなかでアンドリアセンは、才能を持った人物が、どのような環境で創造性を育み、時代からどのような影響を受けて、創造性を発揮するに至るのか、を考察している^{註8}。アンドリアセンは、任意に「ルネサンス期のフィレンツェ」を選択し、歴史上の二人の天才であるレオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロの生育環境、業績、時代背景を詳述しながら、時代や環境が創造性に及ぼす影響を考察した。そしてこの事例研究から、「創造性を育てる文化的な環境」として、①「自由、新規、先端にいるという自覚」、②「創造的な人たちの臨界量」、③「自由で公正な競争的な雰囲気」④「指導者とパトロン」、⑤「経済的な繁栄」の5つを挙げている。②「創造的な人たちの臨界量」のなかには、以下の文章がある。「孤独は、創造的な生産物を作る実際の創造過程では必要だ。しかし触媒となるのはしばしば他者との相互作用であり、知的な思想の交換である。フィレンツェの芸術は、才能ある若者たちを抱えた親方芸術家の経営する工房で作られた」。また④「指導者とパトロン」には以下の文章がある。「創造的な人が独立心に富み個人主義的であっても、やはり直接育てる人や、支持する人に助けられている。(中略)パトロン、つまり芸術家や科学者を支える財力のある人たちも、創造性に重要な寄与をする。(中略)創造性のある人々は不遜なほど自信を持っているが、また自己批判的であり完全主義者でもあるので、これらの要素が創造性を抑えることもある。パトロンからの感情のこもった、あるいは理解にもとづく支持は、こうした否定的な力の作用に対抗する重要な育成の源となる」¹⁾。

この文中にでてくる「工房」と「パトロン」に注目し、北杜夫における「工房的組織」と「パトロンの支援」を担ったと考えられる人物や組織を図1に配した。主要な「工房的組織(A)」として「松本高校」「文芸首都」「文学界」「慶應大学」を、「パトロンの支援(B)」として「中央公

論社」「新潮社」「家族・親族」「慶應大学」などをあげた。

「松本高校」時代の主な関係者には、親友・辻邦生や恩師・望月市恵、ダンネ会のメンバーなどがいる。特に文学の道を志すきっかけを作った辻邦生の存在は大きい⁵⁴⁾。また北にトーマス・マンの小説を紹介した望月市恵は、この「松本高校」時代における最大の指導者といえる³⁹⁾。北杜夫とともにトーマス・マンに傾倒した辻邦生は、後年、ともにチューリッヒ湖畔のマンの墓を詣でている¹¹⁾。また1955年（昭和30年）のトーマス・マンの死去に際して、二人で追悼対談を行い、それを文芸首都に掲載した（図2）。

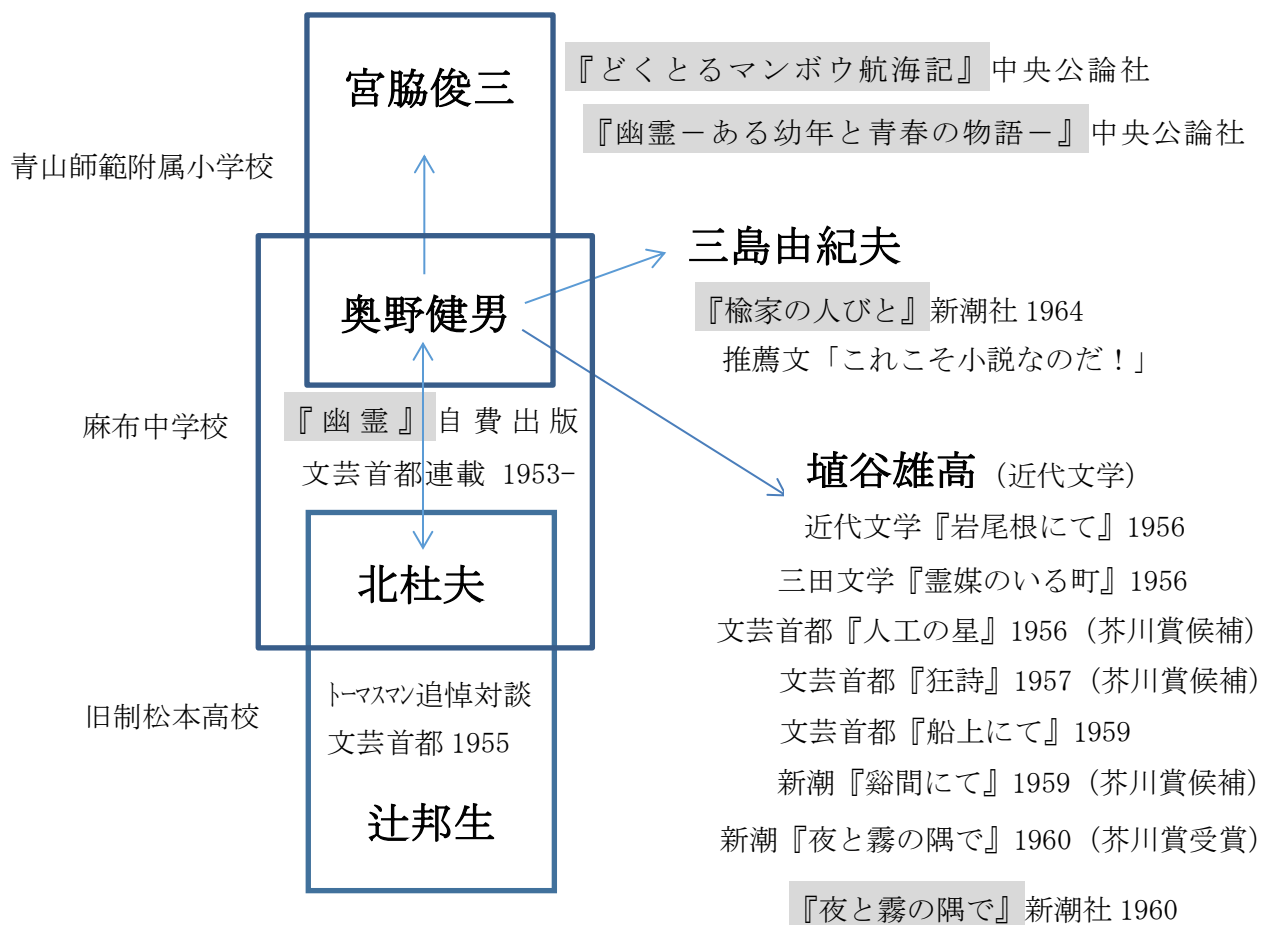


図2. 1953-1964年 創作関連人物

同人誌「文芸首都」は、北にとって、もっとも「工房的組織」というにふさわしい。この同人時代は、無名作家としての修業時代であり、また初期作品の多くをこの時期に創作している。文芸首都は、保高德蔵が主宰した同人誌であり、ここで佐藤愛子や田畑麦彦などの文学青年たちと交流し、互いに刺激を受け、切磋琢磨した。北は「同人誌時代の追憶」と題して、保高德蔵の人となりをお話している。「保高先生が文壇の先生方の仲間であったから、『首都』のチンピラたちもそういう先生方になんかの機会でお目にかかれた。」「先生は一貫した主張というより誰の流儀も認める方であった」「先生は不平も言われず、やはりニコニコされていたのでみんなけっこう甘やかされていたというところは確かにある。」⁸⁾ 保高德蔵を中心とした同人「文芸首都」は、アンドリアセンのいう「自由で公正な競争的な雰囲気」を醸成し、「文学志望の生意気な小僧っ子」⁸⁾であった北の創造性開花に一役買ったものと考えられる。文芸首都に掲載された『人工の星』『狂詩』は芥川賞候補となり、作家として大成する足掛かりとなった。東北大学医学部時代に文芸首都の同人となり、インターン実習と医師国家試験合格後に上京することで、文芸首都での創作活動はさらに活発となった。同時に、慶応大学病院神経科に勤務し、精神科医としての修業時代がはじまる。この「慶応大学病院神経科」は、徒弟制度による医師の養成機関という意味で「工房的組織」であり、また後年、躁うつ病を発症してからは同門医師が北の主な担当医となっており、北杜夫を支えた援助者としての側面を併せ持っている。さらに水産調査船（照洋丸）の船医となる経緯も、慶応大学医局の医師が深く関わった。こうして『どくとるマンボウ航海記』が創作される下地ができあがっていく。

4. プロデューサー「奥野健男」登場

北杜夫が「どくとるマンボウ」として名をはせ、流行作家としての地位を確立するのに重要な役割をはたしたのが文芸評論家の奥野健男である（図2）。前述したように、奥野は、偶然に再開した麻布中学の後輩・斎藤宗吉が、『幽霊』の作者・北杜夫であることを知る。ここから奥野は、北の全面的な理解者として迅速に動き出す。ひとつは、同人誌「文芸首都」に限定されていた北の作品発表の場を、他雑誌（「近代文学」「三田文学」）にまで広げている。特に奥野の紹介により、「近代文学」に『岩尾根にて』が掲載されたことで、北は「近代文学」に『死霊』を発表していた埴谷雄高の知己を得ることになる。埴谷の教示を受けた『谿間にて』は商業文芸誌である新潮に掲載され、芥川賞候補作となった。その翌年1960年には、『夜と霧の隅で』（新潮）が芥川賞を受賞する⁴⁰⁾。

二つ目に、奥野は北を「天才作家」⁴²⁾と評して文壇へとつなげていく。既に作家としての評価を確固なものとしていた三島由紀夫に、奥野は北を紹介した³⁹⁾。三島は北の結婚式にも出席し³⁷⁾、三人はよく会う間柄となる^{8, 11, 40)}。北の代表作『楡家の人びと』の連載中は、三島が北に、「会うたびにディテールまでこまかく親切に批評し、助言していた」と奥野は語っている⁴¹⁾。同作の刊行にあたっては、三島が推薦文を寄せ、「戦後に書かれたもっとも重要な小説の一つである。（中略）これは北氏の小説におけるみごとな勝利である。これこそ小説なのだ!」と激賞した^{33, 41)}。

また同小説の第二部執筆にあたり、北は三島から長篇小説を書く上での心構えを丁寧に教わったという⁸⁾。

三つ目は、前述した宮脇俊三の「どくとるマンボウの誕生」³⁸⁾で詳述されているように、中央公論社の編集員だった宮脇に対して、奥野が「航海記」の出版を推したことである。奥野と宮脇は、青山師範小学校の同級生であった(図2)。『夜と霧の隅で』の執筆に行き詰っていた北は、宮脇の説得に応じて『どくとるマンボウ航海記』を執筆し、結果、1960年に発表された『どくとるマンボウ航海記』はベストセラーに、『夜と霧の隅で』は芥川賞を受賞する^{注10}

このように奥野健男は、できうる限りの手段を用いて、文壇での成功へと北杜夫を導いていく。「北杜夫」のペンネームは、本人・斎藤宗吉によるものであるが、それを「作家・北杜夫」としてメジャー・デビューさせることに尽力したのが、プロデューサーの役割を担った奥野だったといえるだろう。さらに北杜夫は、宮脇との共同作業により、「どくとるマンボウ」なる新たなニックネームを獲得し、1960年(昭和35年)にベストセラー作家と芥川賞作家の肩書を得ることになる。奥野は直接的な経済的支援をしたわけではないが、この成功により北杜夫は経済的に自立し、結婚を機に居候していた兄・茂太宅から独立する(宮脇俊三宅の隣に新居を建てる)。また慶応大学病院を辞職し、さらに兄の診療所での診療も辞め、専業作家となる道を選んだ。

アンドリアセンは、「パトロンからの感情のこもった、あるいは理解にもとづく支持は、(中略)重要な育成の源となる」と述べている。自費出版した『幽霊』は、当初まったく評価されず、また当時はその他の作品も酷評されることが少なくなかった¹¹⁾。そのような状況で、奥野は北を全面的に支持し、文壇への具体的な道筋を描いた。奥野健男は、北杜夫の成功を語るうえで欠くべからざる援助者のひとりといえる。町沢は、「天才的創造というものは、その創造者自身の営みの中でのみ完成されるということは、むしろまれである。多くの天才的創造者には媒介する役割をもつ人々、あるいは触媒的な役割をもつ人などが現れてくる」と述べ、創造における媒介者の共感的役割や庇護的役割の重要性を指摘している³⁴⁾。北野は天才論を主題とした著作のなかで、天才が創造性を実現するためには「再現性」や「共感性」をもたらす人物が必要であり、「若くて才能のある人物を、裏側でサポートする人物」のことを「共感の神」と呼称し、「天才は、共感の神によって支えられ、創作活動ができる」と論じている³²⁾。

5. 援助者としての家族

当然のことながら、家族・親族は、成育環境要因として北に多くの影響をあたえ、また援助者として北を支えた。両親や叔父は、北の人格形成や志向性に深くかかわっている。また北の創作ジャンルの一つである「自伝的小説」⁵⁵⁾のなかでは、登場人物のモデルにもなっている。処女作『幽霊』は、母への思慕がテーマであり、後年にも『母の影』を著している。(自費出版であった『幽霊』の出版費用は、母が工面している)。歌人であり精神科医でもある父・斎藤茂吉は、『楡家の人びと』の登場人物・徹吉のモデルであり、父の短歌と人物像に迫った「茂吉評伝四部作」は大佛次郎賞を受賞した。北は、『どくとるマンボウ回想記』において、「わが人生をふり返って

みて、さして満足もしないが、それほど後悔するわけでもない。なにより私が幸せだと思うのは、高校に入る頃から父をずっと尊敬し、これまた変わり者であった母をもまた好きであったことである。」²³⁾と語っている。

国民的歌人であった父・茂吉においては、そこに文学者、創作者としての姿勢をもみただであろう。北は『茂吉評伝』において、自身の青年期における文学開眼に、父がいかに大きな存在であったかを著している。「私はゲーテやヘッセやカロッサ、そしてトーマス・マンよりも、まず最初に茂吉の歌によって、文学愛好者と変じたのである。まさしく恥ずかしいことだが、もはや初老を過ぎた私は厚顔にも更めてこのことを書き記す。」^{16,56)}。また北の日記(1952年7月16日:25歳時)¹⁴⁾には、『どくとるマンボウ航海記』(1960年刊)に至る過程にも、父・茂吉(1953年2月25日逝去)の影響を推察できる記述がある。「昨夜帰宅してから、父の全集の8巻 一滞欧中の随筆をよんでいる。(中略)読みながら僕は何度も、いいなあ、実にいいなあと思った。昨夜はそのためコーフンして仲々寝つけなかった。かつて父の散文に感嘆したのは『念珠集』の一節である。しかし、これらの短文にはそれ以上の魅力を感じ、ほとんど今までの僕の文章、主としてマンからきたあの文体すらも、変えようかと考えたほどのものがあった。そして、なんだか、ひたすらに外遊してみたくなった。やはり行きたいのはドイツである。」¹⁴⁾

北は昆虫採集に没頭し、動物学者を志した時期があるが⁷⁾、父の反対で医学部に進学した経緯がある。昆虫・動植物への関心は、叔父・米国の影響が大きく、この米国は『為助叔父』のモデルであり⁵⁷⁾、「叔父さん」というモチーフは北作品のなかで繰り返し登場する。

北は松本高校時代に終戦を迎えており、戦中・戦後は、親族・知人から多くの経済的な援助を受けている。医学部卒業後の26歳時に父・茂吉が他界し、同年に慶應大学病院神経科に入局して以後は、兄・茂太宅に居候していたが、『どくとるマンボウ航海記』が出版された翌年(34歳時)に結婚して兄宅から独立した。同年に慶応大学病院を辞職したが、兄の診療所の手伝いはしばらく続けている。作家修業時代と、本格的に作家活動へと移行する時期は、経済的にも心理的にも、家長である兄・茂太が援助者として中心的役割を担ったといえる⁴⁹⁾。

39歳の顕在発症後の環境因としては、喜美子夫人と長女・由香の存在が大きい。創作においては、エッセイにもよく登場し²⁰⁾、小説のモデルにもなっている¹³⁾。また躁うつ病に罹患した北の日常生活をあらゆる面で支えた。当初は「途方に暮れて」「どうしていいかわからなくて」「泣いていた」妻も⁴³⁾、しだいに北の気分変動の波と行動パターンを知るにつれ、対処法を習得していく。49歳時に、躁状態での株取引で借財を負ってからは¹⁰⁾、妻が金銭管理を行うようになる。「私と妻の力関係が逆転したのは、私が株で大借金をつくって破産したからだ。幸い、本の印税で何とか借金は返済することができたが、そのやりくりを一手に引き受けた妻は、私を禁治産者並みに扱うようになった。とにかく、お金を持たせてくれないのである。外出するときには、これこれこういう用事で出かけるのだ、と言ってお小遣いをもらった」「株騒動のときに、出版社から多額の前借りを重ねていたので、妻は出版社に対して、直接私に金を渡さないよう申し入れていたのである」「私たち夫婦を知っている先輩や友人たちは、ことごとく私を非難し、妻の味方をするのである。しかも、『もし奥さんがいなかったら、北君はどうに破滅していただろう』

などと口をそろえて言うので、私は悔しくてたまらない」²⁰⁾。健康面では、医者から禁酒・禁煙を命じられ、喫煙と飲酒も妻の管理下（缶ビール1日3本など）とされた^{注11)}。

長女・由香は、長じて会社勤務のかたわらエッセイストとしても活躍し⁵⁰⁾、北との対談集も出版した²⁴⁾。北の良き理解者であり、幼少期から北の躁状態での破天荒な行動も一緒になって楽しんで²⁴⁾。最後の躁状態（72-74歳）は、娘が北に競馬を勧めたことを契機に始まり、さらに娘同伴でギャンブルの旅（ラスベガス、ソウル、マカオのカジノ）に出掛けている²⁵⁾。

6. 出版社「新潮社」「中央公論社」

『どくとるマンボウ航海記』は中央公論社から刊行され、その後も多くの「マンボウ」を冠した著作が、他の出版社からも刊行された。ただし北は、宮脇俊三と中央公論社への恩義を忘れず³⁰⁾、「どくとるマンボウ」という名称の初出は、中央公論社で出版した作品でのみ使用している^{注12)}。一方、北作品をもっとも多く出版したのが新潮社であり、芥川賞作品『夜と霧の隅で』をはじめとして、北杜夫全集（全15巻）も新潮社が編纂している。全集の創作余話で北は、「出版社としては新潮社にもっとも多く恩恵を受けた」として謝意を著した³⁰⁾。北は49歳時に躁状態での株取引で大損失をだし、経済的苦境に陥ったが、多くの出版社や知人からの前借り・借金等により切り抜けた。

アンドリアセンは、「つまり芸術家や科学者を支える財力のある人たちも、創造性に重要な寄与をする」としてパトロン的重要性を指摘した¹⁾。現代では、古来に存在したような個人レベルのパトロンという存在は少なく、それにかわって、作家と出版社のような形で、文壇における創作者を支える組織が形成されていると考えられる^{注13)}。編集者は、創作の企画やアイデアを提案することも多く、また資料提供や創作環境の整備（例えばホテルの一室を借りての執筆作業）²⁹⁾なども行っており、創作過程の一翼を担っているといつてよい。またそれ以外にも、例えば「マンボウ・マブゼ共和国」の紙幣印刷を、北は新潮社に依頼している¹²⁾。北のエッセイには編集者がよくでてくるが、一緒に食事をしたり、北の精神状態を心配したり、ギャンブル旅行に同伴したりと様々な場面で登場し、公私にわたり北を支えている。特に北は、担当編集者がかわることを嫌い、「新潮社のいいところは（私にとって）担当の編集者をほとんど変えぬ点にあろう」と述べており³⁰⁾、作家と編集者という肩書を超えて親しくなることを好んだ。これもアンドリアセンのいう「パトロンからの感情のこもった、あるいは理解にもとづく支持は、（中略）重要な育成の源となる」という論点を¹⁾、北杜夫に適応できる証左のひとつといえる。

7. 北杜夫の時代

昭和2年（1927年）に生まれた北杜夫は、戦前・戦中・戦後を生きた昭和を代表する作家の一人である。三島由紀夫と辻邦生は大正14年（1925年）に生まれ、奥野健男と宮脇俊三は大正15年・昭和元年（1926年）に出生している（次項：図3）。

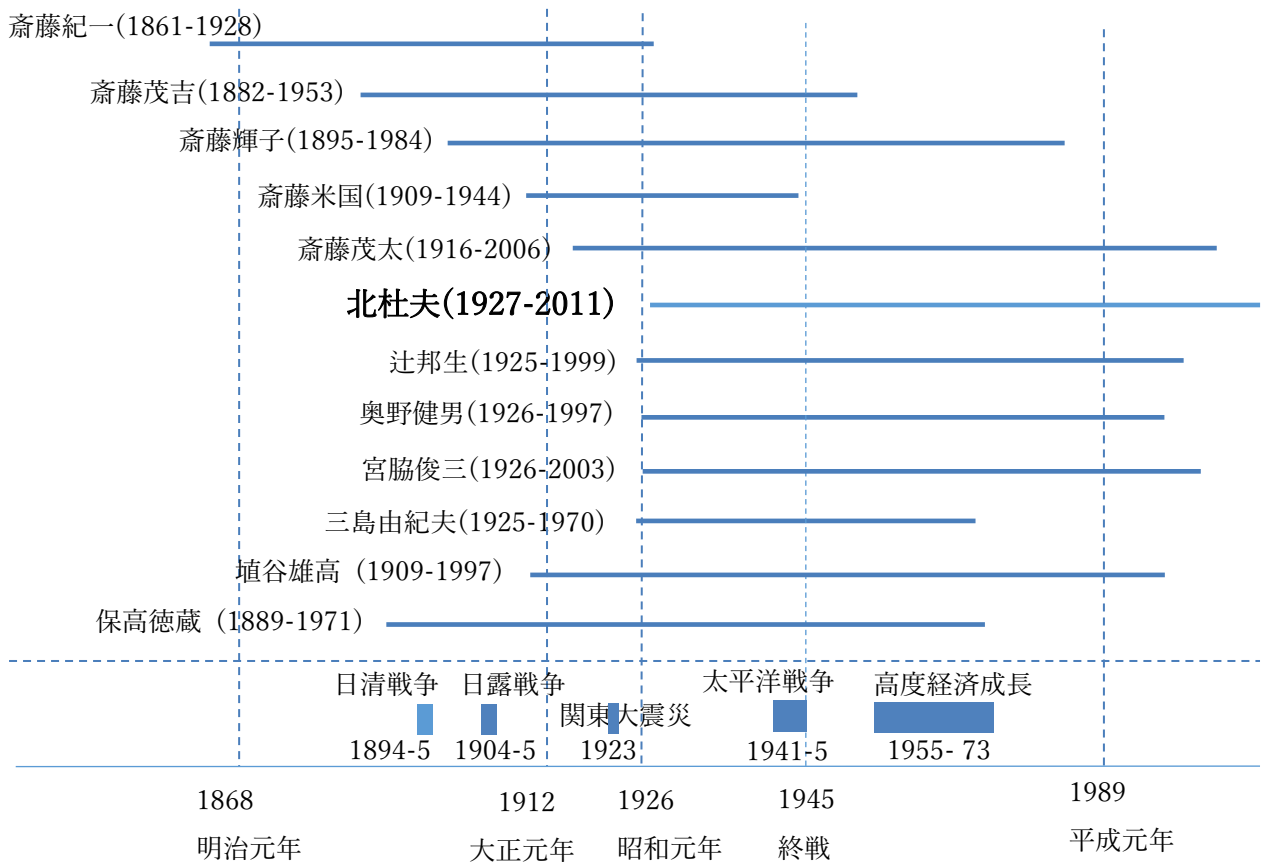


図3. 明治・大正・昭和・平成

編集者の斎藤国夫は、2013年の北杜夫企画展において、北作品を次のように総括した⁴⁷⁾。「北作品の流れをみると、『どくとるマンボウ航海記』から『さびしい王様』までのベストセラーが続いた時代は、まさに日本の高度経済成長期^{注14}と重なっている。昨日より今日がよくなると信じられたのが高度成長期だとすれば、それを担った無数の庶民に笑いと慰謝を提供し、圧倒的に支持されたのが北作品だったといえるだろう。しかも、そのブームを支えた中心には団塊の世代がいた。彼らの多くは、私小説の流れを汲む日本文学にあきたらず、積極的に世界文学に触れている。『榎家の人びと』の推薦文で三島由紀夫は、『不健全な観念性をみごとに脱却している』と指摘している」⁴⁷⁾

トーマス・マンに傾倒しながらも、『狂詩』などの初期作品は、太宰治や芥川龍之介などからの影響がみてとれる⁴¹⁾。また日本文学におけるユーモアの流れは、夏目漱石の系譜を指摘する論もある^{38, 41)}。戦後作家の「第三の新人」と位置づけられる遠藤周作や阿川弘之は、公私とも北との親交が深く、対談集や旅行記などを出版した。北杜夫は、それまでの日本文学の流れを汲みながら、遠藤周作、阿川弘之、三島由紀夫などの先輩作家や佐藤愛子や辻邦生といった同期の作家

たちとともに、新たな日本文学を創出するための「創造的な人たちの臨界量」¹⁾に達したと考えられる。知的な刺激と自由に満ちた環境は、「自由、新規、先端にいるという自覚」¹⁾を形成し、新しい日本文学を創造する可能性を押し広げた。さらに高度経済成長という過去の日本に類例をみない「経済的な繁栄」¹⁾は、新規的文化が醸成されるための環境を整えたと考えられる。

『どくとるマンボウ航海記』の「あとがき」にある一文は、半世紀以上が経った今なお新規性を放ち、驚きをともなったユーモアを読者に提供している。

「私はこの本の中で、大切なこと、カンジんなことはすべて省略し、くだらぬこと、取るに足らぬこと、書いても書かなくても変わりはないが書かない方がいくらかマシなことだけを書くことにした。」⁵⁾

思想信条を表現する芸術活動としての側面が強かった日本文壇において、この北が放った一撃は、上でもなければ下でもなく、右でもなければ左でもない、第三の道があることを宣言しているように思われる^{注15}。「無用の用」を堂々と表明し、そこに価値をみる突き抜けた視点があればこそその一文である。「役に立たないこと」「役に立たぬ者」「日陰者」に対する暖かい眼差しは、北文学の通奏低音といえる^{注16}。

8. 結語

戦時中の北杜夫は、軍国少年であった¹⁰⁾。松本高校で終戦を向かえ、戦後の混乱と復興期が、作家としての修業時代と重なっている。北杜夫と同時代を生きた多くの日本人は、終戦の前後で価値観を大きく揺さぶられる経験をした。欧米や海外に対する感情は、劣等感やあこがれ、負い目や自尊心などが複雑に折り重なっている。また渡航制限のあった当時、日本人にとって海外は未知なる世界であった。喜美子夫人は語っている。「あの時代に『どくとるマンボウ航海記』でみなさんの海外旅行の夢を代表できたことは、やっぱり大きいことだったんじゃないかと思いません。」⁴⁴⁾

北杜夫は、当時の日本人が抱いていた海外へのあこがれやコンプレックスを、『どくとるマンボウ航海記』という作品を通して、晴れやかに軽々と乗り越えてしまった³⁸⁾。奥野は本書の書評で語っている。「なぜ老いも若きもこの本をそんなに愉快がったか。それは日本人が、はじめて肩をいからした優越感も、肩をすぼめた劣等感もなく、ごく自然な素直なかたちで、外国の港々に寄り、その人たちと人間としてつきあったということが、なんとも言えず嬉しかったのだ。(中略)日本人の対西欧劣等感とその逆投影であるかたくなな日本国粹主義との両方に無縁な、後進国コンプレックスのない、自由で自立的なそして気張らない最初の旅行記である。(中略)その意味で、本書は一見ふざけているようで、日本文学史に画期的な役割を果たした本である。」⁴¹⁾

北杜夫は、きたるべき日本の文学を先取りし、また日本の文化を進化させたクリエイターといえる。現在、世界中がインターネットでつながり、ブログなどを通して誰もが容易に発信者となれる時代が到来した。誰もがエッセイストとなれる時代であり、誰もが海外に行くことができ、海外から多くの旅行者が来日する時代となっはじめて、我々は北杜夫がどれだけ時代の先駆者

であったかを思い知るのである。あるいは半世紀以上を経てもなお、まだ時代は北杜夫に追いついていないのかもしれない。

謝辞

本論作成にあたり、貴重なご助言を賜りました竹内正先生、ご高閲いただきました斎藤国夫先生、栗原正哉様に深謝申し上げます。また本論寄稿にあたり御承諾を賜りました斎藤喜美子様に深く感謝申し上げます。

本論に関連して開示すべき利益相反はない。本研究はJSPS科研費JP16K13194の助成を受けたものである。

注 1：青山脳病院は、1906年（明治39年）に祖父・斎藤紀一によって東京市赤坂区青山に開設された巨大な精神病院。4500坪に及ぶ広大な敷地の上に、「ローマ式建築」と称される、豪華なつくりの病棟がそびえていた²⁾。関東大震災の翌年（1924年）に失火で全焼したため、世田谷松原に土地を借り、父・茂吉が金策に奔走して、新病院（青山脳病院本院）を再建した。北が出生した1927年（昭和2年）に、父・茂吉（44歳）は祖父・紀一から病院長職を引き継ぎ、翌年に祖父は心臓麻痺で死去した^{17, 19, 35)}。

注 2：母・輝子とダンス教師との仲が新聞のゴシップ記事となり、これに激怒した父・茂吉の命で、母・輝子は、北の叔父・西洋宅に預けられた。この別居状態は、北杜夫が高校に入学する直前まで続いた^{19, 35)}。

注 3：北杜夫による恩師・望月市恵への追悼文。「私は真の意味で師と仰ぎ、心の寄りどころとしてきたのは、これまで生涯でたった二人である。『死霊』の作者埴谷雄高氏と望月先生である。」¹⁵⁾

注 4：文芸評論家の奥野健男が主に評論の対象にしたのは、太宰治や坂口安吾、三島由紀夫など。現在、新潮文庫の太宰治作品の多くに、奥野の巻末解説が掲載されている。また北杜夫が初期創作において太宰治の影響を受けたことは、北杜夫自身と奥野健男が言及している。「日本文学」や「太宰治」「三島由紀夫」に精通した文芸評論家・奥野健男による北杜夫評『北杜夫の文学世界』⁴¹⁾は、北杜夫の日本文壇における位置付けを考察するにあたっての基本文献といえる。

注 5：実際に北杜夫は、奥野と再会した同年の文芸首都（1955年12月刊）に、「精神分析的批評について」と題した6頁の論評を発表し、奥野の精神分析的な文学批評について論じている。「奥野健男の『三島由紀夫論』（文学界・昭和29年3月号）は、本格的に精神分析的技法を文芸批評にもちこんだものとして注目されてよい。が、ここでは、わざと細部をとりあげて、先に述べた問題の一つに触れることにしよう。」「奥野健男のものとしては『武田泰淳論』（文学界29年8月号）のほうが、もつとのびのびと理論を展開して、武田の作品の設定する更に以前のものにメスを与えていることに成功しているようだ。」

- 注 6：父・茂吉を題材とした随筆の依頼は、当初、新潮社から受けていたが、「諸々の事情により、父がもっとも多くの本を出し世話を受けた岩波書店の雑誌『図書』に『茂吉あれこれ』と題して連載することになった」¹⁶⁾と北は述べている。またその経緯には辻邦生が関与している²⁹⁾。「岩波の『図書』に連載している『茂吉あれこれ』は、そもそも16年前から、新潮社から頼まれていたものであった。(中略)それをいよいよ書くことになったとき、辻邦生が、『茂吉のことを書くなら、岩波じゃなくてはいかん』と言い、わざわざ岩波書店に出かけて、社長に交渉までした。辻さんは松本高校時代、私に文学の目を開いてくれた恩人である。そのため、彼の好意をしりぞけることができず、とうとう『図書』に連載することになってしまったのである。」²⁹⁾ また戦後、兄・茂太の開業資金を、母・輝子が「岩波書店などから前借り」¹⁹⁾して工面している。
- 注 7：佐藤愛子著『戦いすんで日が暮れて』は、夫の事業の失敗により巨額の借金を背負った佐藤の実話を基にした短編小説。1969年（昭和44年）直木賞受賞作。
- 注 8：アンドリアセンは、同書の第5章「何が創造的な脳を創造するのか」で、創造性の育成に対する環境因子の役割を検討している¹⁾。「人類の歴史における主要な創造性の発揮例を図示してみると、集中して見出される傾向に気づく。飛びぬけた創造性のある人々は、通常時間に関して無作為に分布していない。私たちの気づくところでは、歴史上のある時期には、きわめて創造的な仕事や思想がほとんど作られていない。ところが他の時期には、溢れ出るばかりに創造性が開花している」。そして「こうした時期は、創造性の育成に対する環境因子の役割を探るうえで、歴史的な実験室ともいえる」として、それを「創造性のゆりかご」と表現し、特に3つの時代と場所（①紀元前4世紀ないし5世紀のアテネ、②19世紀後半のパリ、③19世紀末から20世紀初頭のアメリカ）を例示している。
- 注 9：三島由紀夫と北杜夫の出会いは、奥野が著した『太宰治論』の出版記念会である⁴⁰⁾。その二次会の帰路、奥野は三島に、当時まったくの無名だった北杜夫を「非常に才能のある『幽霊』を書いた人」と紹介したが、酔っていた北杜夫は、三島の代表作『仮面の告白』の表記に対し、「丁度を”てふど”と書かれているが、あれはやはり”ちゃうど”でしょう」と言い、さらに「少しは辞書を引いてください」と言い放ってしまう⁸⁾。その夜、奥野は、激怒した三島から「君がいう北杜夫というのは、あれは失礼だ。ああいう失礼なことをいう文学青年はいくら天才であろうと、ぼくはつきあいたくない」⁴⁰⁾との電話を受けることになる。しかしその後、北杜夫が有名になったある日、三島は北杜夫に「はじめまして」と挨拶し、北杜夫の結婚式にも出席したい言い⁴¹⁾、『楡家の人びと』が連載される頃には「三人で半年に1回ぐらい一緒に食事し、飲み、だべる会合」を催していたという⁴¹⁾。
- 注10：奥野は北杜夫との対談で、この二作品を以下のように評価している。「あのとき直木賞で『どくとりマンボウ』、『夜と霧の隅で』で芥川賞という二冠に、史上はじめてなるのではないかと、ぼくら思ってたんだけどね。そういうのが一度出てもいいと思うんですよ。直木賞作品としてもこれしかない、芥川賞としてもこれしかない。それが同一人物であったなんていうのは、非常におもしろくて、それが北さんの場合は、事実可能性があったこ

とだと思っんですね。」^{40,41)}

- 注11：それでも北杜夫は、妻の監視の目をかいくぐり、ビールやタバコを隠し持つ策を講ずる。「タバコと酒をめぐる攻防」を北は、「まるで密輸犯と税関の闘いである」と書いている²⁰⁾。また72歳の躁状態では、自宅の本や自分の生原稿を古本屋に売って、ギャンブル（競馬）資金を得ている²⁰⁾。
- 注12：「どくとりマンボウ」を冠した著作は「どくとりマンボウ航海記」「どくとりマンボウ昆虫記」「どくとりマンボウ小辞典」「どくとりマンボウ途中下車」「どくとりマンボウ青春記」「どくとりマンボウ追想記」「どくとりマンボウ医局記」があり、以上の初出はすべて中央公論社から刊行されている。ただし唯一の例外として、日本経済新聞の連載「私の履歴書」を書籍化した『どくとりマンボウ回想記』（日本経済新聞出版社：2007年）がある。
- 注13：例えば浮世絵における「浮世絵師」と「版元」の関係などもそれにあたる。あるいは文豪・夏目漱石であれば、プロデューサーが高浜虚子（『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に掲載）、パトロン的組織が朝日新聞社（教職を辞し職業作家として同社に入社）となる。他に現代のクリエイターで例えると、宮崎駿（映画監督）⁵²⁾と鈴木敏夫（プロデューサー）と徳間書店（スタジオジブリを設立）の関係など。映画『SING/シング』（2016）は、表現者（歌手）とプロデューサー（主人公ムーン）とパトロン（ナナ）の関係をうまく描いている。漫画『重版出来！』（松田奈緒子作：2016年テレビドラマ化）は、現代の出版社と漫画家の関係を主題としている。
- 注14：1955年（昭和30年）から1973年（昭和48年）は、年平均10%以上の経済成長を達成し、戦後の高度経済成長期とされる。1956年に経済企画庁は「もはや戦後ではない」と発表し、1960年に首相・池田勇人が国民所得倍増計画を発表。1964年に海外渡航が自由化、東京オリンピックが開催。1968年に国民総生産が米国に次いで世界第二位となり、1970年には大阪万博が開催された。一方、1970年には三島由紀夫が自衛隊の市ヶ谷駐屯地で割腹自殺、また同年は70年安保の全共闘学生運動が、1972年には連合赤軍による浅間山荘事件が発生している。
- 注15：本人も、以下のように語っている。「私の小説のいいところはなまじっか社会性を持たぬことだと言ってくれる者もいる。三島由紀夫氏は、『楡家の人びと』について、『これほど巨大で、しかも不健全な観念性をみごとに脱却した小説を、今までわれわれは夢想することもできなかつた。…これは北氏の小説におけるみごとな勝利である』と書かれた。しかし、埴谷雄高氏は、私の小説を認めると共に、その思想性のなさをそれとなくさとしてくれたものであった。」²⁶⁾「昭和35年3月に出版されたが、日本中が騒然となった安保の年であったにもかかわらず、日本の社会とも政治ともまったく無縁なエッセイがその年の売上げ第一位を記録していた。」²⁰⁾。筆者はこれが、北の自然科学的素養（特に昆虫学）に依拠している可能性を指摘したい³¹⁾。これに関しては別途考察の予定。
- 注16：以下は、「文芸首都」に掲載された北杜夫のエッセイの一節で、『どくとりマンボウ医局記』に再掲されている。「しかるに近頃、私の勤務している研究室で、私は、役立たずの余計

者、ゴクつぶし、居ても居なくても変わらないが居ない方がいくぶんマシな男、そんな具合にあつかわれているらしい。」¹⁸⁾

文献

- 1) Andreasen NC: *The Creating Brain: The Neuroscience of Genius*, The Dane Press, New York/Washington, D.C. 2005. (長野敬、太田英彦訳: 天才の脳科学. 創造性はいかに創られるか. 青土社, 東京, 2007.)
- 2) 別冊宝島編集部編: 北杜夫 マンボウ文学読本. 宝島社, 東京, 2016.
- 3) 古川久: 北杜夫の青春意外伝. 別冊新評北杜夫の世界. 新評社, 東京, 1975.
- 4) 原子朗、森禮子: 北杜夫と「文芸首都」. 別冊新評北杜夫の世界. 新評社, 東京, 1975.
- 5) 北杜夫: どくとるマンボウ航海記. 中央公論社, 東京, 1960.
- 6) 北杜夫: どくとるマンボウ途中下車. 中央公論社, 東京, 1966.
- 7) 北杜夫: マンボウおもちゃ箱. 新潮社, 東京, 1967.
- 8) 北杜夫: 人間とマンボウ. 中央公論社, 東京, 1972.
- 9) 北杜夫: どくとるマンボウ追想記. 中央公論社, 東京, 1976.
- 10) 北杜夫: 北杜夫による北杜夫. 青銅社, 東京, 1981.
- 11) 北杜夫: マンボウ交友録. 読売新聞社, 東京, 1982.
- 12) 北杜夫: マブゼ共和国建国由来記. 集英社, 東京, 1982.
- 13) 北杜夫: 優しい女房は殺人鬼. 新潮社, 東京, 1986.
- 14) 北杜夫: 或る青春の日記. 中央公論社, 東京, 1988.
- 15) 北杜夫: 悼 望月市恵先生 「教」より「育」の人. 信濃毎日新聞, 1991年9月23日.
- 16) 北杜夫: 青年茂吉 — 「赤光」「あらたま」時代. 岩波書店, 東京, 1991.
- 17) 北杜夫: 壮年茂吉 — 「つゆじも」～「ともしび」時代. 岩波書店, 東京, 1993.
- 18) 北杜夫: どくとるマンボウ医局記. 中央公論社, 東京, 1993.
- 19) 北杜夫: 母の影. 新潮社, 東京, 1994.
- 20) 北杜夫: マンボウ愛妻記. 講談社, 東京, 2001.
- 21) 北杜夫: マンボウ遺言状. 新潮社, 東京, 2001.
- 22) 北杜夫: 酔生夢死か、起死回生か. 新潮社, 東京, 2002.
- 23) 北杜夫: どくとるマンボウ回想記. 日本経済新聞出版社, 東京, 2007.
- 24) 北杜夫、斎藤由香: パパは楽しい躁うつ病. 朝日新聞出版, 東京, 2009.
- 25) 北杜夫: マンボウ最後の大バクチ. 新潮社, 東京, 2009.
- 26) 北杜夫、辻邦生: 若き日の友情 辻邦生・北杜夫往復書簡. 新潮社, 東京, 2010.
- 27) 北杜夫: マンボウ家族航海記. 実業之日本社文庫, 東京, 2011.
- 28) 北杜夫: マンボウ最後の家族旅行. 実業之日本社, 東京, 2012.
- 29) 北杜夫: 私はなぜにしてカンヅメに大失敗したか. 実業之日本社, 東京, 2012.
- 30) 北杜夫: 見知らぬ国へ. 新潮社, 東京, 2012.

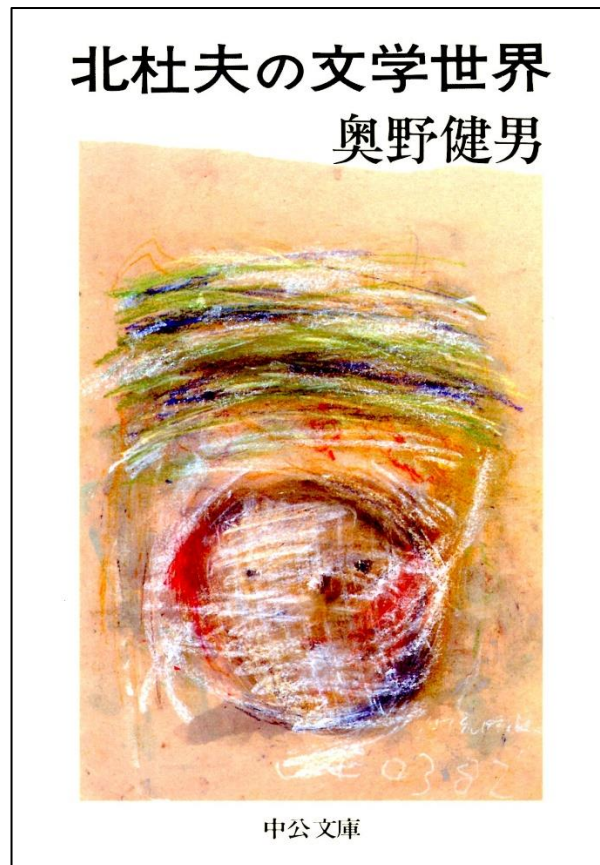
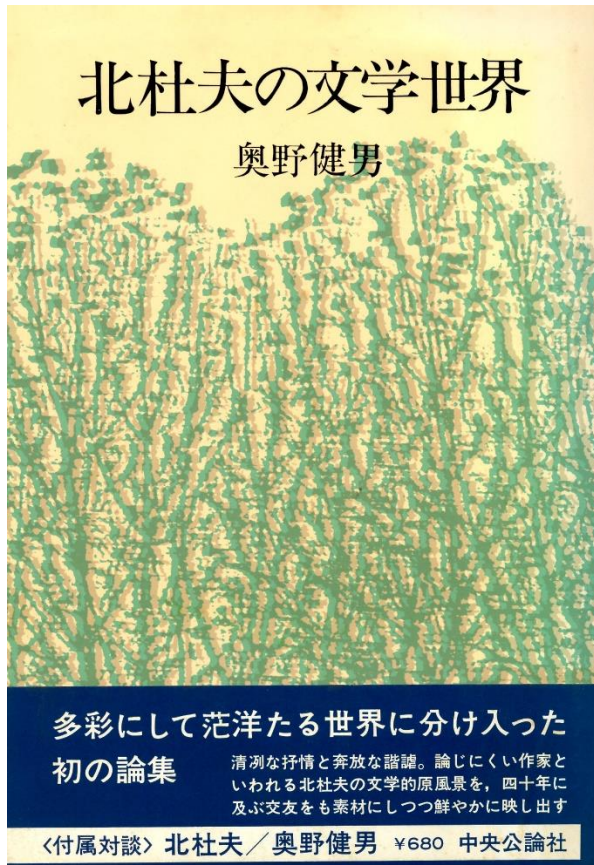
- 31) 北杜夫：マンボウ思い出の昆虫記 虫と山と信州と。信濃毎日出版社，長野，2013.
- 32) 北野唯我：天才を殺す凡人。日本経済新聞出版社，東京，2019.
- 33) 小林信彦：『楡家の人びと』の年。世田谷文学館編：北杜夫展——世田谷文学館開館5周年記念世田谷文学館，東京，2000.
- 34) 町沢静夫：創造における媒介者と役割。臨床精神医学講座 S8 病跡学。中山書店，東京，2000.
- 35) まえだあきら：北杜夫 完全年譜。別冊新評北杜夫の世界。新評社，東京，1975.
- 36) まえだあきら（作成）：斎藤家の人びと。別冊新評北杜夫の世界。新評社，東京，1975.
- 37) 三島由紀夫：どくとるマンボウ結婚記。文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館。河出書房新社，東京，2012.
- 38) 宮脇俊三：どくとるマンボウの誕生。世田谷文学館編：北杜夫展——世田谷文学館開館5周年記念世田谷文学館，東京，2000.
- 39) 根津武夫：「北杜夫のいた頃の松本高校」。「北杜夫と松本」展示解説図録。松本市立博物館、松本市立博物館分館旧制高等学校記念館ほか編：松本まると博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録，松本，2013.
- 40) 奥野健男、北杜夫：ぼくらの文学奇縁。別冊新評北杜夫の世界。新評社，東京，1975.
- 41) 奥野健男：北杜夫の文学世界。中央公論社(中公文庫)，東京，1982.
- 42) 奥野健男：中学時代からの北杜夫。文藝別冊・北杜夫・どくとるマンボウ文学館。河出書房新社，東京，2012.
- 43) 斎藤喜美子：「マンボウ家の50年」。北杜夫著「マンボウ最後の家族旅行」。実業之日本社，東京，2012.
- 44) 斎藤喜美子：「わが夫・北杜夫」。北杜夫 マンボウ文学読本。宝島社，東京，2016.
- 45) 斎藤国夫編：略年譜「北杜夫展」。世田谷文学館編：北杜夫展——世田谷文学館開館5周年記念世田谷文学館，東京，2000.
- 46) 斎藤国夫編：北杜夫著作目録・略年譜。追悼総特集 北杜夫 どくとるマンボウ文学館。河出書房新社，東京，2012.
- 47) 斎藤国夫：「山を愛し、虫を愛した貴公子」。「北杜夫と松本」展示解説図録。松本市立博物館、松本市立博物館分館旧制高等学校記念館ほか編：松本まると博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録。松本市立博物館，松本，2013.
- 48) 斎藤国夫編：略年譜「北杜夫と松本」展示解説図録。松本市立博物館、松本市立博物館分館旧制高等学校記念館ほか編：松本まると博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録。松本市立博物館，松本，2013.
- 49) 斎藤茂太：精神科医三代。中央公論新社，東京，1971.
- 50) 斎藤由香：窓際OL 会社はいつもてんやわんや。新潮社，東京，2005.
- 51) 斎藤由香：「ヘンテコリンが好きだった父」。北杜夫 マンボウ文学読本。宝島社，東京，2016.

作家・北杜夫と躁うつ病 — 北杜夫をめぐる人びと —

- 52) 高橋徹、松下正明：宮崎駿にみる身体感覚 — 体感体験と創造性 —. 病跡学雑誌82 : 75-86, 2011.
- 53) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 — 双極性障害の診断. 病跡誌, 95:58-74, 2018.
- 54) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 — 顕在発症前エピソードと『どくとるマンボウ航海記』. 信州大学図書館研究8 : 57-87, 2019
- 55) 高橋徹、松下正明：作家・北杜夫と躁うつ病 — 初期作品の系譜. 信州大学附属図書館研究 9 : 145-173, 2020.
- 56) 竹内正：松本時代の北杜夫 其の一 『寂光』に映された父茂吉の陰影. 信州大学附属図書館研究 6 : 33-77, 2017.
- 57) 辻邦生、北杜夫：「ぼくたちの原風景」. 追悼総特集 北杜夫 どくとるマンボウ文学館. 河出書房新社, 東京, 2012.

関連書籍・関連資料

1. 奥野健男『北杜夫の文学世界』（中央公論社，1978）（個人蔵）：左
2. 奥野健男『北杜夫の文学世界』（中公文庫，中央公論社，1982）（個人蔵）：右



3. 白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館

特別展「文芸評論家 奥野健男の仕事」2006年開催

白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館
特別展

「文芸評論家 奥野健男の仕事」

「ぼくの文学にとって
坂口安吾は父であって
太宰治は母であり、
そして
三島由紀夫は死であったからだ」



講演会
「北杜夫・伊藤整・奥野健男」
講師 曾根隆雄氏（日本大学教授）
日時 7月9日（土）

文学散歩
「北杜夫が住んだ三軒茶屋を歩く」
日時 8月20日（水）※詳細は要覧参照

平成18年6月6日（火）から7月30日（日）まで
白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館

住 所 〒150-0011渋谷区東四丁目9-1
TEL 03-3486-2791 FAX 03-3488-2793
<http://www.city.shibuya.tokyo.jp/est/kyodo/index.htm>

交 通 渋谷駅東口から都バス 日本国庫センター前（学6）
国学院大学前下車徒歩五分
ハチ公バス 郷土博物館・文学館下車すぐ

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休 館 日 月曜日（休日の場合はその直後の平日以外の日）

入 館 料 一般100円（80円）、小中学生50円（40円）
（1）内120名以上の団体料金
60歳以上の人、障害のある人及び付き添いの人は無料



4. 『宮脇俊三 KAWADE 夢ムック 文藝別冊』（河出書房新社，2009）（個人蔵）



5. 信州大学附属図書館「北杜夫文庫」創設記念講演会（2015年7月12日）

信州大学附属図書館

「北杜夫文庫」創設記念講演会
北杜夫と信州

7月12日(日) 14:00～16:30
信州大学中央図書館 2階セミナー室

信州大学附属図書館「北杜夫文庫」

作家・北杜夫さんが没後まで手元に残っていた蔵書のうち約六〇〇冊が、奥書の斎藤真弓子さん、お嬢様の斎藤由香さんのご厚意により、信州大学附属図書館に寄贈されました。附属図書館ではこれを記念して、斎藤由香さんによる講演会を開催いたします。寄贈された蔵書の紹介や「北杜夫と信州」をテーマとした展示会も行わせてお楽しみください。

「北杜夫文庫」創設記念講演会
信州を愛した北杜夫

講師 斎藤由香氏
(エッセイスト、北杜夫さんの長女)

歌人である祖父・斎藤茂吉の素顔、祖母・輝子が79歳で南極、80歳でエベレスト、85歳でガラパゴスなど、世界108ヶ国を旅行した話、北杜夫の躁うつ病のてんやわんやの話、家族で上高地を訪れた思い出など、楽しい話をお届けします。講演終了後に、書籍販売と斎藤由香さんによるサイン会も実施します。

日時 7月12日(日) 14:00～(開場 13:30)

場所 信州大学中央図書館 2階セミナー室

●お申込方法●
入場無料。定員75名。
メールまたはハガキに、〒番号、住所、氏名、TEL、希望人数を書いてお申し込みください。申込先着順で定員になり次第締め切らせていただきます。(7/8必着)
お申込先：〒390-8621松本市旭3-1-1 Email: library@shinshu-u.ac.jp
お問合先：信州大学中央図書館 ☎0263-37-2177

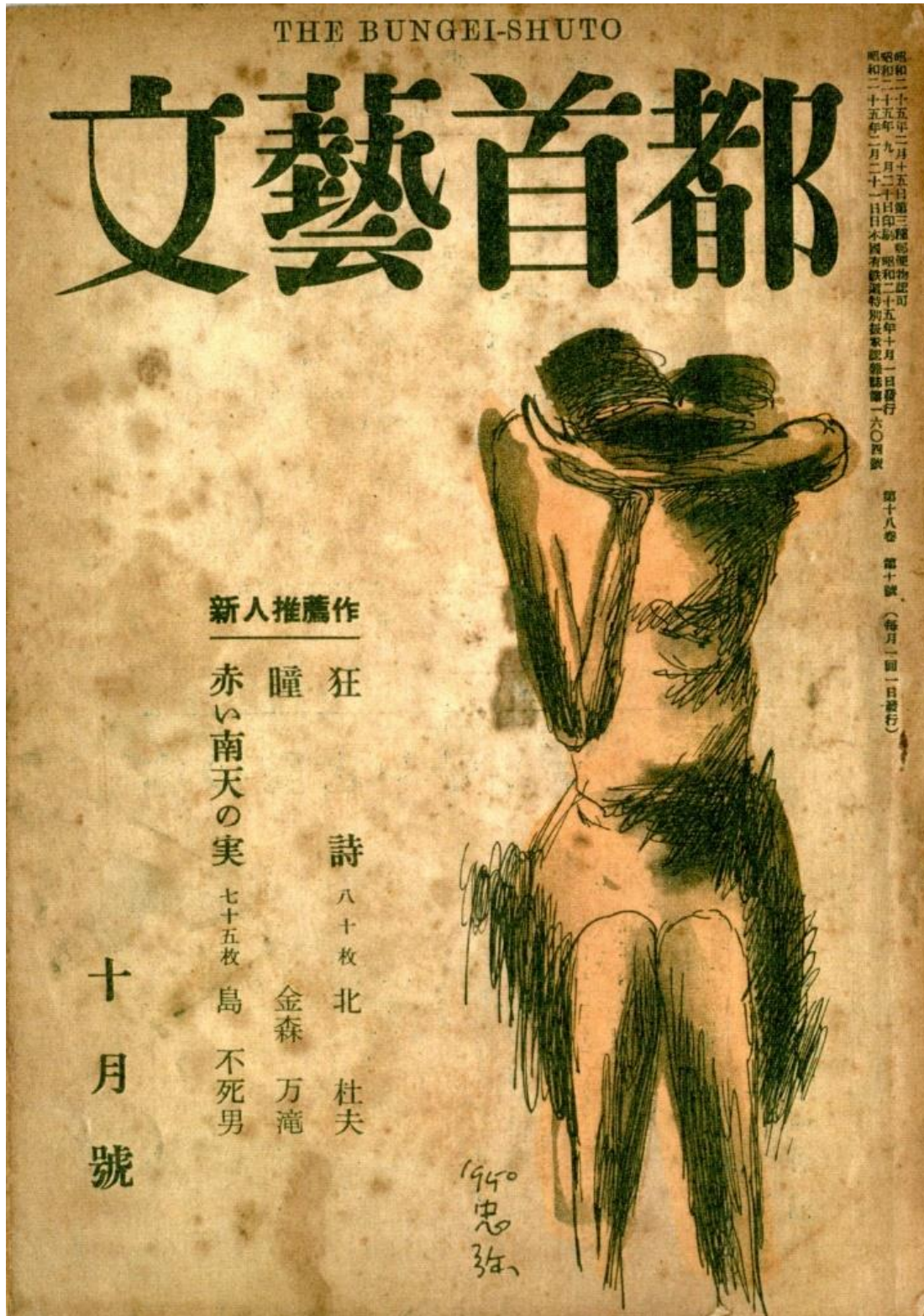
斎藤由香さんプロフィール

サントリー役員・エッセイスト。
著書に、週刊読者の連載をまとめた「読者の本音な側面」(7/8必着)「読者の本音な側面」(7/8必着)「読者の本音な側面」(7/8必着)など。歌人・斎藤茂吉の妻であり、祖母・輝子の生涯を描いた「ほろりとよばれた親戚」(7/8必着)「ほろりとよばれた親戚」(7/8必着)「ほろりとよばれた親戚」(7/8必着)等。

主催：信州大学附属図書館 協力：松本市立博物館(旧制高等学校記念館・山と自然博物館)、松本市中央図書館

6. 文藝首都 昭和25年10月号：表紙・目次

北杜夫『狂詩』収載（信州大学附属図書館「北杜夫文庫」所蔵）





文芸首都 十月號 目次

表紙・カット……………高橋忠彌

新人推薦

狂詩……………八十枚……………北杜夫(5)

瞳……………金森万瀧(25)

赤い南天の實……………七十五枚……………島不死男(35)

文學の發見……………新人小説月評……………高村達治(55)

推薦作 その他……………保高德藏(61)

首都言……………(82)

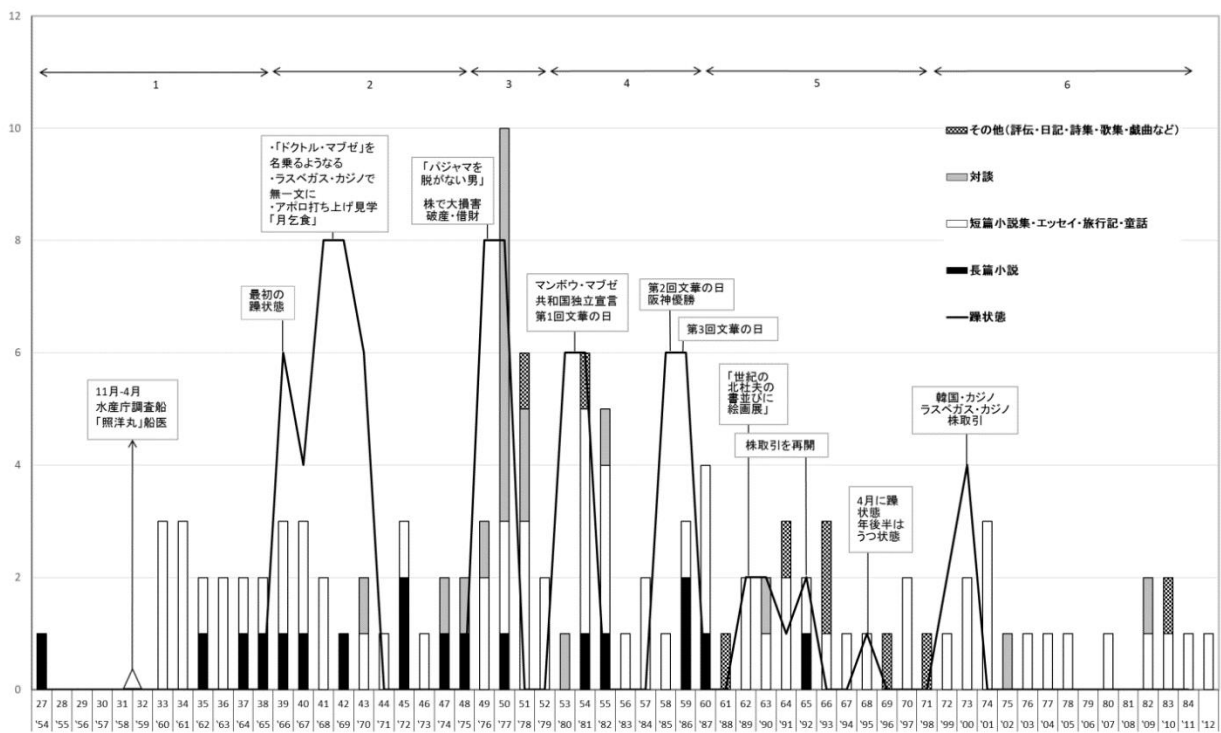
一つの悲願の反響について……………編集部(59)

短篇小説

浜牛蒡……………山村昌樹(63)

参考資料：北杜夫の著作物と躁病エピソードの概観図（文献53より引用）

横軸の上段が年齢、下段が西暦年。著作物は、初出の単行本のみ対象とし、文庫本や全集は含めていない。また過去に発表された作品を再構成した短編小説集、自選短編集は除いてある。作品のジャンルは、「長篇小説」「短篇小説集・エッセイ・旅行記・童話」「対談」「その他」に分類した。棒グラフが、その年の単行本の出版数を表す。躁状態の線グラフは、その年に1回でも躁病エピソードがあれば上向きにプロットしてある。躁状態の程度をグラフの高さで表したが、これは具体的な逸話を踏まえて、筆者らが主観的に評価したものである⁵³⁾。



参考資料. 北杜夫の著作物と躁病エピソードの概観図